

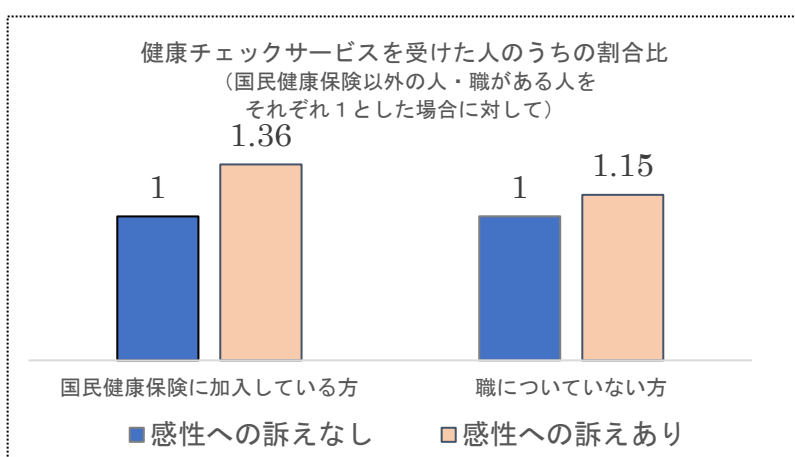
理性でなく感性に訴えることで健康格差是正につながる可能性： 健康チェックサービス受診割合が 15%－36%増

東京大学の近藤尚己准教授・石川善樹特任研究員は、人が持つ「感性」に訴えることで、普段あまり健康的な活動に関心が持てない人々も健康サービスを活用するきっかけを作れる可能性を示しました。

貧困や失業など、社会的なストレスにさいなまれていると合理的な判断が難しくなり、健康づくりのような理性的な行動が難しくなります。これが健康格差を生み出す理由の一つと考えられています。

一方、楽しさ、お得感、信頼感、性的な関心など、人の持つ「感性」は直感的な行動を起こす強いきっかけとなることが知られています。今回、感性に訴えることにより、社会的なストレスがあっても健康行動をとりやすくなるのではないかと考えて観察研究を行ったところ、この仮説を支持する結果が得られました。

研究にはショッピングモールやパチンコ店など人の集まる場所でセルフ健康チェックサービスを展開する企業の既存データを分析しました。ナースキャップを被りワンピース型の白衣を着た女性*1 を配置し呼びかけを行ったところ、そうでない場合に比べて無職の人と国民健康保険加入者*2 の受診率が上昇しました。この傾向は男女ともにみられ、感性に訴えることが社会的に不利な立場にある人々の健康行動



を促す可能性を示唆しました。この結果は 2018 年 1 月に *Journal of Epidemiology & Community Health* で発表されました。

なお本研究結果は、健康格差の是正対策として、本研究で用いた事例のような方法を推奨するものではありません。どのような感性への訴え方が適切であるかについてはさらなる検討が必要と考えています。

※1 健康チェックサービスという場面から看護師風の白衣を着た非医療従事者が雇用されました。

※2 無職の人と国民健康保険加入者は健診受診率が低い可能性があるという研究結果があります。

下記ウェブサイトにも本論文で用いられた英語の表現方法や扱った事例へのご批判への回答を掲載しています。

【お問い合わせ】

近藤 尚己 (東京大学大学院医学系研究科 健康教育・社会学分野 准教授)

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 医学部 3 号館 S310

「近藤尚己ウェブサイト」のコメント欄をご利用ください：http://plaza.umin.ac.jp/~naoki_kondo/

国際誌 *Journal of Epidemiology & Community Health* に発表した論文の要旨は以下のとおりです。

健康チェックサービスへの行動変容に情緒的刺激を活用することと

サービスを利用した人の社会経済状況の関係（日本のパチンコ店での研究）

【背景】 社会経済的に不利な立場の方たちは慢性的なストレスのために健康を損ないやすいことが知られている。慢性的なストレスは誰にとっても思考の偏り（認知バイアス）を引き起こしやすく、ストレス回避のために快樂をもたらす行動（喫煙・飲酒・ギャンブルなど）につながりやすいことが知られている。そうであれば反対に、情緒的な刺激により健康チェックなど疾病を予防するための行動へと促すことができれば社会全体の健康格差対策につながる知見が得られるかもしれない。本研究ではこの仮説を検証した。

【方法】 簡単な健康チェックサービスを行う企業が、パチンコ店で 320 回の健康チェックサービスを行った。1721 名が介入セッション（情緒的刺激あり）、6507 名が通常のセッション（情緒的刺激なし）で健康チェックサービスを受けた。介入セッションでは丈のやや短いワンピース型白衣を着た若年女性スタッフを雇用した。介入セッションと通常のセッションにおいて健康チェックを受けた人のうち社会的に不利な立場の方の割合を比較した。分析では個人・店舗レベルの考えられうる交絡因子を調整した。

【結果】 個人の健康リスクと店舗内のデータ集積性を調整しても、通常のセッションに比べて介入セッションでは社会的に不利な方たちの割合が多いという結果であった。その割合の比は無職の人では 1.15 倍（95%信頼区間：0.99-1.35）、国民健康保険に加入している人では 1.36 倍（1.00-1.86）であった。この傾向は男女ともにみられた。

【結論】 本研究では仮説を支持する結果をえた。社会的に不利な立場の方に健康チェックを受けてもらうために、それを誘う「仕掛け」を活用することができるかもしれない。なお、感性に働きかける仕掛けを用いることに関しては十分な倫理的な配慮と議論が必要である。

文献情報：

Kondo, Naoki, and Yoshiki Ishikawa. "Affective stimuli in behavioural interventions soliciting for health check-up services and the service users' socioeconomic statuses: a study at Japanese pachinko parlours." *J Epidemiol Community Health* (2018): jech-2017.

<http://dx.doi.org/10.1136/jech-2017-209943>